

国語学習プリント 古典入門

date : 年 月 日

学習内容：古典の基礎を学ぶ

年 組 番

氏名



古典を学習する上で、留意すること

① 「仮名づかい」について

昔と今とでは、仮名の使い方が違うことがあります。

《はじめに》

i 濁点・半濁点のつく仮名はなかった。

濁音・半濁音(濁点「゛」や半濁点「゜」)を書き表す方法が昔はなかったため。

※教P154 「いろは歌」を見るとわかると思います。

※教科書では理解を深めるためにふつてある場合があります。

ii 拗音(やゆよ)や促音(っ)をあらわす仮名もなかった。

iii 句読点(。や、)もなかった。

※教科書では理解を深めるためにふつてあります。

iv 現代では使われなくなった仮名があった。

「ゐ(ヰ)」「ゑ(ヱ)」など

◎ 「歴史的仮名遣い」とは

仮名は太平洋戦争終結後、現代のようにまとめられました。それ以前は、古典を含め昔の仮名のつかいかたをしていました。いわゆる旧仮名遣い。これを歴史的仮名遣いといいます。

これに対して、現在の仮名のつかいかたを現代仮名遣いといいます。

歴史的仮名遣い ≠ 文語

※あくまで仮名遣いのことをいうもので、「文語」「口語」とは違う次元のものです。歴史的仮名遣いで表現されていても「口語文」のこともあるということです。

② 古典語(文語)には、

ア 古典だけに使われる言葉(現代では使われなくなった言葉)イ 形が同じかほぼ同じだが、意味が変わってしまったものウ 形が同じかほぼ同じで、現代でも同じ意味で使われるものがある。

アの例

いと 訳「たいそうとても」  
わろし 訳「よくない、見劣りがする、みつもない」  
つきづきし 訳「似つかわしい」  
ことさめて 訳「興ざめして」

イの例

かなし 現「泣きたくなるほどつらい」  
をかし 古「いとしい、かわいい」  
あはれ 現「笑えるほどおもしろい」  
うつくし 古「趣がある、みごとだ、すばらしい」  
あはれ 現「みすばらしい、気の毒だ」  
うつくし 古「しみじみとした情趣」  
うつくし 現「きれいだ とどのつている」  
うつくし 古「かわいらしい」

問題 次の古典語を「現代仮名遣い」に直して書きなさい。

- |          |        |           |        |
|----------|--------|-----------|--------|
| 1 あど     | 2 こゑ   | 3 をとこ     | 4 ぢごく  |
| 5 みづ     | 6 おはす  | 7 言ふ      | 8 こひ   |
| 9 うへ     | 10 にほひ | 11 まうす    | 12 かうし |
| 13 からうじて | 14 やうす | 15 じやうげ   |        |
| 16 けふ    | 17 てふ  | 18 げせう    | 19 くわし |
| 20 うつくしう |        | 21 やむごとなし |        |

国語学習プリント 古典入門

date : 年 月 日

学習内容：応用編

年 組 番

氏名



③【係り結び】 古典特有の決まり（法則）について。

ある特定の語（助詞）が文中にあると、文末（句末）が「終止形」では終わらない法則を「係り結び」といいます。

（係助詞）  
特定の助詞

なむ

ぞ

か

こそ

文末

連体形

連体形

連体形

已然形

已然形：已然とはすでにそうなっているの意。  
連体形：体言（名詞）につながる形

例 花ぞ昔の香にほひける

※係助詞自体に意味はありませんが、強意（強調）を表わすとされています。

④覚えておくと便利な「ば」の用法

古典では「ば」という助詞のすぐ前の活用語の形によって訳し方が変わってきます。

▼已然形十ば……確定条件

▼未然形十ば……仮定条件

形動「上手なり」の已然形

・小町は歌の上手なれば

〔小町は歌がうまいので〕

動「見る」の已然形

・振り放け見れば

〔振りあおいで見ると〕

動「思ふ」の未然形

・よき歌を詠まむと思はば

※確定条件……で……どちらで訳すかは状況を見て

文語助動詞活用表

Table with columns for conjugation (比況, 希望, 使役, 受身, 断定, 伝聞, 打消, 推量, 打消, 推量・意志, 完了, 過去) and rows for various auxiliary verbs (ごとし, たし, まほし, しむ, さす, す, らる, る, たり, なり, なり, まじ, じ, ず, めり, まし, らし, べし, けむ, らむ, むす, む, り, たり, ぬ, つ, けり, き). Includes a '意味' (Meaning) column and a '接続' (Connection) column.

※活用形内の○は、その活用形が存在しないことを示す



国語学習プリント **古典** date: 年 月 日

学習内容: \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番

蓬萊ほうらいの玉の枝——「竹取物語」たけとりから 氏名 \_\_\_\_\_



蓬萊ほうらいの玉の枝——「竹取物語」から

① 今は昔、竹取たけとりの翁おきなといふものありけり。②

野山のやまにまじりて竹を取りつつ、よろづよろづのことに使いひけり。④

名をば、さぬきのみやつことなむいひける。⑤

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。⑥

⑥ あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。⑦

それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。⑧

竹取物語 「源氏物語」に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」と紹介されている九世紀末から十世紀初頭にかけて成立したと思われる作者未詳の我が国最古の作り物語。

① 今は昔 「今ではもう昔のことであるが」と訳されることが多い。その後の物語の書き出しが「今は昔」と始まることから、慣用語となっていた。現代の昔話の「むかしむかし」にあたる。

② けり 過去（伝聞過去）を表わす文語助動詞。（〜た。〜たということだ。）

③ まじりて 「分け入って」と訳されることがほとんど。

④ よろづ いろいろな たくさんの

⑤ なむ 係助詞（「係り結び」を起こす助詞）

⑥ あやしがりて 不思議に思つて

⑦ たり 完了した。・存続している。〜である。〜を表わす文語助動詞。

⑧ 見れば 見ると

見れば 已然形 + 「ば」 || 確定条件（見ると、見たので）

参考文語動詞「見る」の活用

見る	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
み	みる	みる	みる	みる	みれ	みよ	

⑨ いと たいそう とても

⑩ うつくしう かわいらしい様子で

参考係り結び

係助詞 なむ …… 連体形

係り結びとは、文中（句中）に特定の語句（係助詞「なむ・ぞ・こそ」など）があると、文末（文末）の語が終止形では終らなくなる古典特有の法則です。

参考文語助動詞

たり	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	意味
たり	たら	けり	けり	ける	けれ	〇		伝聞過去（…た、…たソウシ）
存続…テイル…テアル	完人…夕							

学習内容 :

年 組 番

蓬萊の玉の枝——「竹取物語」から

氏名



子供を授かったと喜んだ翁は、その子を籠の中に入れて大切に育てた。子供はすくすくと成長して、わずか三か月ばかりで一人前の娘になった。その姿は輝くばかりに美しく、辺りに光が満ちるようであったから、娘を「なよ竹のかぐや姫」と名づけた。

美しいかぐや姫のうわさが広まると、多くの男たちが、ぜひ結婚したいと集まってきた。かぐや姫は、なかでも熱心な五人の貴公子の求婚を断り切れず、望みの品を持参した人と結婚すると言て、一人ずつに難題を出した。かぐや姫の望みの品は、いずれも入手至難のものばかりであったが、五人の求婚者は、それでも姫との結婚を諦め切れず、それぞれに知恵や富の力で難題に挑むのであった。

その一人、くらのちの皇子は、蓬萊の玉の枝を探しに行くことと人々に告げて、いったん船出するが、すぐに引き返し、かねての計画どおり、人目につかぬ家に閉じ籠もった。それから三年の間、玉作りの匠たちと寝食を共にして、にせの玉の枝を作らせた皇子は、今船を下りたばかりというふうをよそおって、翁の家を訪れる。そして、架空の冒険談をまことしやかに物語る。

②「これやわが求むる山ならむ」と思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のみぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鏡を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立り。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照り輝く木ども立り。

その中に、この取りてまうで来たらしは、いとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

ところが、くらのちの皇子が得意げにこう語っているところへ、玉作りの匠たちが押しかけてくる。千日余りも働かされたが、まだ褒美がもらえない、どうにかしていただきたい、という匠たちの訴えて、皇子の策略はいへんに破れてしまうのである。

他の四人も、あるいは大金を使い果たし、あるいは危険を冒して大けがをするなど、目ざす品物を手に入れることができず、求婚は全そ失敗に終わった。

このように人々の心を奪うほどの美しさを備えたかぐや姫を、時の帝は、ぜひ宮中に迎え入れたいと、たびたびお召しになったが、かぐや姫はそれにも応じようとしな。

そうしているうちに、さらに三年の月日がたつた。その春の初めから、かぐや姫は、月を見てはなげき悲しむようになる。秋になってそのなげきがいっそう大きくなるのを見かねた翁が、訊を尋ねると、「私は、実は月の都の者です。訊あつて人間世界に参りましたが、八月十五夜には、月に帰らなければなりません。」と、涙ながらに打ち明けた。

いよいよ中秋の名月の夜、帝は、二千人の兵士を遣わして翁の家を守るようお命じになった。しかし、月の都の人々に対しては、兵士たちも全く無力であった。かぐや姫は、翁には着ていた衣を、帝には天人の持参した不死の薬を、それぞれ手紙を添えて残し、人々の悲しみを後に天に昇らせてしまった。

帝は、かぐや姫から不死の薬を贈られていたが、かぐや姫のいない世にいつまでもとまる気がしない。そこで、「どの山が天に近いか。」とお尋ねになると、ある人が、駿河の国にある山が、都からも近く天にも近いとお返事申しあげたので、その山に使者をお遣わしになった。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。

そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山を、「ふじの山」とは名づけける。

その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝へたる。

- ※五人の貴公子に出した難題を教科書やワーク・便覧などで調べてみよう。
- ・石作の皇子 → 仏の御石の鉢
  - ・庫持の皇子 → 蓬萊の木の枝
  - ・右大臣阿倍御主人 → 火鼠の皮衣
  - ・大納言大伴御行 → 竜の頭の五色の珠
  - ・中納言石上麻呂足 → 燕の子安貝
- ① 「まことしやか」の意味
- ② 「これやわが求むる山ならむ」の部分には「係り結び」となっています。  
「や」をうけて「む」が連体形の「む」になったということです。  
なにも変わってないじゃないか！文末でもないところが係り結びをするのか！  
と思われませんが、教科書では省略するかたちで表記しています。  
この部分は「。」でくくられるようなところで、実質的な文末なのです。  
変化していないのは「む」は終止形も連体形も「む」であるからです。  
「古典2文語助動詞活用表」参照
- ③ 山のみぐりとは？  
山のまわり(周囲)
- ④ うれしきことかぎりなし。について
- a 意味(訳) ← うれしくてたまりませんでした。
- b なぜうれしいのか？ → ここが蓬萊の山だとわかったから
- c しかしそれは、まことしやかな作り話
- ⑤ この取りてまうで来たらしは 意味(訳) ※まっつ▼「行く」の謙讓語参照  
この(ここに)取つてまいりましたのは
- ⑥ のたまひし 意味(訳) ※まっつ▼「言」の尊敬語に終結過去をあらわす「き」の連体形「しがいたもの」  
おっしゃった
- ⑦ 「ふじの山」と名のついた由来をどう述べているか。  
本文 士どもあまた具して山へ登りけるより  
訳 兵士たちをたくさん登らせたところから
- ⑧ 最後の場面に見える「係り結び」の確認  
なむ……ける ……たる

国語学習プリント

古典入門

date : 年 月 日

学習内容：「故事から生まれた言葉」を学ぶ

年 組 番

今に生きる言葉 (故事成語)

氏名



矛盾

楚人に、盾と矛とを鬻ぐ者有り。

これを誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり。」と。

又、其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなり。」と。

或るひと曰はく、「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如。」と。

其の人、応ふること能はざるなり。

楚の国の人で、盾と矛を売る者がいた。

(その人が) 盾をほめて、「私の盾の堅いことといったら、(これを) つき通せるものはない。」と言った。

また、矛をほめて、「私の矛のするどいことといったら、どんなものでもつき通せないものはない。」と言った。

(そこで、) ある人が、「あなたの矛で、あなたの盾をつき通すとどうなるのかね。」と尋ねた。

その人は答えることができなかったのである。

① 盾と矛とを鬻ぐ者は、盾と矛についてそれぞれなんと言ったか。

その部分に 盾 については赤線を 矛 については青線を引きなさい。

② 其の人とは次のどちらのことを指すのか。

ア 盾と矛とを鬻ぐ者 イ 或るひと

③ 「矛盾」という言葉の意味

☆次の [ ] に入る故事成語を「故事」や「意味」から想像して書きなさい

推敲

故事 唐の詩人賈島が、「憎推月下門」の詩句の「推」を「敲」にしようかと迷ったことから  
意味 詩文の字句を練り、書きなおしていくこと

蛇足

故事 最初に蛇の絵を描き上げた者が、蛇にはない足を描き足してしまったことから  
意味 あっても役に立たない余計なもの

四面楚歌

故事 項羽(項王)は漢の兵が四方で楚の歌を歌うのを聞き、漢は楚の地を占領したのかと嘆いたことから  
意味 敵中で孤立すること

漁夫の利

故事 シギと貝が争っているとき、通りかかった漁夫(漁師)が両方を得たことから  
意味 両者が争っている間に第三者が利益を横取りすること

五十歩百歩

故事 戦の中で五十歩逃げた者が百歩逃げた者を臆病者と笑ったことから  
意味 わずかな違いで本質は変わらないこと 大差のないこと

助長

故事 宋の人が、自分の植えた苗を早く成長させようとして、苗を引き抜き枯らしてしまったという孟子のたとえ話から  
意味 手助けをしてかえって害すること

守株

故事 宋の国の人があつて来た兔が株にぶつかって死んだのを見てそれ以来、働きもせず株の番をしていたが、兔は得られなかった  
意味 古い習慣にとらわれて全く進歩のないこと 融通のきかないこと

杞憂

故事 杞の国の人があ、天が崩れ落ちてこないかと憂いだ(心配した)ことから  
意味 取り越し苦労をすること 無用の心配

吳越同舟

故事 春秋時代、吳と越の国は敵どうしだったが、もし暴風の時き同じ舟に乗ってれば協力し合っだろうという孫子の言葉から  
意味 仲の悪い者が同じ所に居合わせること

date :      年      月      日

-----  
学習内容 :

\_\_\_\_\_年\_\_\_\_\_組\_\_\_\_\_番

氏名 \_\_\_\_\_
